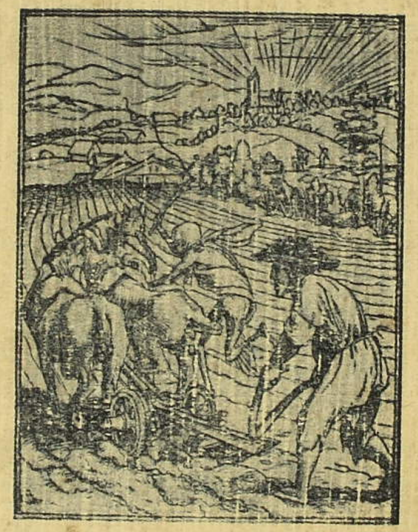
詩集

共生の旗

白鳥省吾著



1922

新潮社出版

詩集

共生の旗

白鳥省吾著

白鳥省吾詩集

共生の旗

一九二二年

新潮社出版

はしがき

△詩集「共生の旗」は一九二一年(大正十年)の作を主とし、詩六十六篇と散文詩八篇とを輯録したものである。この年はこれまでになく詩が多く書けた、いま此の一冊に最も自分に近い一ケ年間の全景を示すことの出來たのは、深い喜びである。

△詩の配列は前詩集の「樂園の途上」に準じて、比較的相均しき環境の中に歌へるものを六つの部門に分類した。この詩集を「共生の旗」と名づけたのは「樂園の途上」から引續いて、文藝に民主的傾向を徹底せしめんとする企圖を示すものであつて、民主的といふ言葉の持つ內容は、世人の多くが考へるやうに單純なものでも一時代のものでもなく、人間の思想感情の種々の要素を包含した複雜な永遠なものであり、現代人の當然持つべき情熱の根本であることを特に言明したいのである。

△私は自分自身の詩に就て、今茲に說明らしいものを附加しない、たゞ既刊の詩集「憧憬の丘」「幻の日に」「世界の一人」「大地の愛」「樂園の途上」の順序で自分の歩いて來た既往を回顧し、いま六冊目の詩集「共生の旗」を世に送るに當つて、自分の菲才を今更ながら感

するのである。

大正十一年五月

東京雜司ヶ谷にて

白鳥省吾

目次

曠野の部落より

朝日に明らむ農家……三
野の少女……六
嘆賞……八
柳並木……一一
夕景……一三
竹藪……一五
洪水の約束……一七
雪の曠野で……二一
七面鳥……二四
輝ける時……二七

沼のほとり……三〇
古風な機織……三三

新しい笛

地主……三七
暗い家……四一
小豚も兎も……四三
女工の母……四五
町の停車場で……四七
畑の花嫁……五一
雪の日の嫁御唄……五七
丘邊……六〇
蟬……六三
夕立……六五

都市哀歌

匿された春……六九
發生……七一
風と共に……七三
鶯……七五
蝸牛の子……七八
美裝せる傴僂女……八一
おとうさん……八二
暗い雨季……八六
產聲……八九
都會……九二
光の底に……九四
日の出前の死……九八

秋夜の幻覺……一〇三
落日……一〇六

途上の禮拜

途上の禮拜……一一一
高原……一一六
湖……一一八
森林……一二一
薄暮……一二四
稻の穗……一二六
湯女……一二八
桃賣る娘……一三一
祭……一三二
溪谷の哀愁……一三五

生の序樂

漂泊……一四一
手……一四四
爛れた眼……一四六
南京街……一四九
野の午前……一五二
荒磯から……一五六
宣言……一五九
愛兒……一六一
齒……一六五
瞰……一六七
新月……一六九

地の叫び

國境の上に……一七五
童話の國……一七五
田園の恐怖……一七七
遠い煙……一八〇
牧場の蔭……一八三
美しい國……一八六
土地……一八九
鐘……一九二
春の耕地……一九七

散文詩

農民の群に……二〇三

街道……二〇七
踊り子……二一〇
朝と夜……二一三
富者……二一六
頽齢……二一九
小春日和……二二三
村の哀愁……二二七

——目次終——

詩集

共生の旗

曠野の部落より

朝日に明らむ農家

凍えた曠野の果ての細い横雲の上から
強い冴え切つた朝日が
きらきらと現はれた、
今まで薄明るかつた朝は
生氣ある光の歡聲に支配された。

枯草に掩はれた丘の上の
朝日に背を向けた小さい農家
不思議なほど小さい農家
その荒壁を日は桃色に照らし
そのあたりの枯草を燃えるやうに照らした。

北國の冬とも見えぬ溫かさうな朝明け
朝日に背を向けた農家のほとりには
一羽の鷄も遊んでゐない
勿論その家族などの見えようわけはない。

何といふ單純だらう
其處に何の修飾もない
たゞ素裸の生そのもの
寧ろ必要以下のみじめさである。

其處には見知らぬ『彼』の家族が住んでゐる
そして彼は毎日せつせと働いてゐるだらう、
朝日に明らむ此の農家の

風漏るほどの穩やかな荒壁は
貧しい農民の生活の顏か。」

野の少女

大きな毛布で雙翼のやうに身を掩うて
氣取らず飾らず
素顏に健康溢れ
小聲に歌ひながらくる少女達よ
北國の町の愛らしい女學生よ。

おゝ素朴なる野の花よ
君達の燃ゆる血潮に幸ひあれ
その日々に歡びあれ
さびしい田園の輝く星よ。

君達の美は野菜畑の美であり
柳の幹や兎の美である
私は一として不調和のものなき
世界の心を感ずる。

されば、
曠野にはかゝる愛らしい少女居り
亞弗利加の樹にはカメレオン棲み
濠洲の野にカンガルー跳ね
東京には都らしき女が居る
一として不調和のものはない。

嘆賞

おゝ曠野の果てにある
あまり高からぬ雪の連山よ、
かうも美しい若々しい存在の
私の見ぬ日も
大空の下に力強く脈打ち
その色彩の變化も豐かに
自らの存在に陶醉してたのか。

旅のうれしさよ
忘れてた意外なものに逢著した嬉しい驚きよ、
私の魂には都會の奇怪な蠱惑が沁み込んでゐる、

都會は人を傷つける牙であり優しい羽毛であり、
掃溜であり酒場を兼ねてゐる、
都會は偃僂病む美しい女のやう
また埃と煙と矛盾との交響樂
これら一切を背に負へる私は
いま靜かな田園の朝に解放され
素裸で日に射し透されてゐる。

おゝ雪の連山よ
君達はいつも靜かにその在る處に存在した
いま紫に褐色に白に微妙な陰影をもつて
明るく日をうけてゐる
おゝ私はかゝる環境に生れ、
こゝを搖籃とした、

曠野の部落より

私は雪の連山の美と力とに今更驚く
おゝ地上の永遠の青春よ、若者よ、素朴のソプラノよ
私は親しく君達を祝福する
輝き立つ君達に逢つた今日の私を祝福する。

柳並木

北國の冬の柳並木は
燃ゆる生を内にひそめて
枝もほそぼそと日に默す、
枯草を住き床として消えのこる雪
路幅せまく病ひのごとく
ぬかるのみのまゝに凍り
ゆきくる人も稀。

おもひでは十七のころ
柳並木いつせいに芽吹くころ
年わかき戀ごころに

熱情の少女慕ひて
わけもなく胸躍らせて
この路を行きし日の
春の盛りの輝かさ
路の廣さの眼に浮べども……。

いま冬の柳並木さびしく
靜かな透きとほる大氣のなかに
柳並木のおの〳〵は孤獨の影に佇む上、
見えざる年のうしろ影
燦爛と遙かなる太陽は
（大空の黄金（こがね）の魔）
花粉のごとき光を散らし
音もなく幾たび廻りしか。

夕景

凍えゆく夕暮の曠野は
暗紫にところどころ雪の白を點ず、
煤けたる汽罐の轟きにつれて
雲のやうに躍りつつ靡く煙は
寒き地の肌に氷に閉ざされし枯草に雪の上に
煤ふらし咽びゆく、
凍る細き流れに添うて
誰か朧ろな一人の影の黑く歩いてゆく。

また田畑のなかに小さき墓地ありて
百に足らぬ粗末な墓の枯草に並ぶが見ゆ、

曠野の部落より

墓地のかなた林に圍まれた數軒の農家には
灯が明るく點つてゐる、
空には星が深く優しく輝いてゐる。

私は見た
家と星と田畑と墓と
おゝ素朴なる人生はこれらに盡きてゐる
この夕さびしく樂しく
わが胸も轟きつつ
うす暗き曠野を過ぐ。

竹藪

毛布にくるまつて横になると
硝子窓から見えるのは
庭園の向うの一むらの竹藪だ。
空は薄寒く曇つてゐる
風があるらしくもないが
竹藪は細かくそよいでゐる。

驚くほど細かくそよいでゐる
樂しさうに靜かにそよいでゐる、
あれが竹藪の一日だ
黑い軟かい大地に深く根を張つて

そよいでゐるうちにも必然の營みを行つてゐる。

日は次第に暮れてゐる
空は薄灰色を濃くして
竹藪も一いろに塗りつぶされる、
けれども竹藪は相變らずそよいでゐるに違ひない
私は今までのやうなそよぎが心眼で見えるやうに感じる
そしてぢつと一かたまりの竹藪を見てゐる
竹藪の奥を透いて
ぽつかりと灯がついた。

洪水の約束

靜かな冬の透明さは
水清く涸れた大河のほとりに在る、
ところどころに砂の河原あらはれて
岸邊に消えのこる雪の模樣の上
裏さを研ぐ日の光
晴れわたる青空の冷たい匂ひ
影うつる枯れ葦や柳も心澄んで
すべて玻璃の輝きに明らむ。

凍えた沈默の中を
大地の脈のやうに照りゆく流れ

その水面に舟二つ浮んで
言葉なき黒い數人は砂利を舟に浚ひ上げては
ときゝ辷るやうに漕いで河原に棄てる、
それをまた他の數人が土堤の上に運んでゆく。

寂しくそぼ濡れて汗ばんで
人々よ終日を働いて
河底をどれほど深くしたか
來るべき夏の洪水の恐怖を
どれほど少くし得るか。

水源の山脈は雪を載いて遠く
曠野の果てに鮮かに起伏し
限りない自然の溢れる力は

嚴かに微笑し沈默する。

水はいま優しい生物のこころに
幽かに河底を流れてゐるが
毎年の夏の太陽と雨と風と草木との
極度に强烈な精彩につれて
洪水の持つ荒い自然の汎濫は
永遠の存在から湧きくる激情は
眼のあたり確かな幻想を人に與へる。

黑く蠢めいて原始人にちかい動作の
無知な祈りの勞働のかなたに
雪の連峰が靜かな光に燦めく時
人間の力の運命的な微小さが

曠野の部落より

哀れにも美しく尊く
冬の風景の中に浮彫される。

雪の曠野で

小さい驛の支線から列車は
凍りついたやうにぢつとして發車しない。
列車のなかには古ぼけたストオヴが
何か鰐などの内臓のやうに赤く黑く
惡い石炭を燻ぶしてゐる、
向ひの腰掛には頰に瘤を垂らした爺が
四合瓶から杯に酒をついで甜めてる
雪のあとの曠野は一しほ寒く黄昏れる
ふと裸馬に乘つた若者が
列車の窓下を田の畦を駈けて行つた
そして十分とたたぬうちに

曠野・部落より

細い一本の瑞木を擔いで戻つて來た。

私は知つてる
舊正月に餅を星のやうにつけて飾る
赤い美しい珊瑚のやうな枝の瑞木を、
（私は少年時代に山の雪の中に
その木を探しに行つたことが度々ある）
若者は此の邊の山の何處にあるかを知つて居て
雪の中でも直ぐ伐つてきたと見える。
なるほどもう三日すると舊正月だから
今日あたりはそちこちの農家で餅春きだらう。

いま若者と馬とは
いかにも氣心の知り合つた樂しさで

一軒の農家に小躍りして行つて隱れた、
其の農家から此處まで何の物音も聽こえないが
茅ぶきの屋棟はいかにも溫かさうに並んで
家族の團欒のさまも目に浮ぶやうだ。

暮れゆく雪冷えの曠野の
をちこちの部落が懷かしく灯を點し初めた頃
驛員はやうやくそれに答へるやうに
發車を報らせる笛を鳴した。

七面鳥

春あさい高い城址の
傍なる明るい谷間に
今も御殿と呼ばれる昔ながらの屋敷があり
いくつかの農家と田畑と竹藪とが
そのあたりに點在して一廓をなしてる。

城址のかなた眺め遙かに
きひるの平野の果てに
雪の連山は白銀の襞を煙らし
崖下をゆるやかに大河ながれゆく時。

御殿の若き主の美しい妻は
今日も庭に下り立ちて七面鳥に餌をやる.
おゝこの佳き妻を置きざりにして
若き主は他所に女を圍ひ
一年に數日しか家に歸らぬといふ。

ほかの夫婦なかのことは
他より覗ひ知られぬ謎だが
若い美しい妻は
夫があつても
寡婦のやうな暮らし、
弓なければ音もたてぬ
ヴアイオリンのやうに寂しい。

靜かな谷間、童話めた谷間の
主なき御殿の庭に春の若草萠え
ほろほろと七面鳥が羽をひろげて
奥さんに餌をねだつて隨いて歩いてる。

輝ける時

廢れた城址の崖の上に
昔の唯一の記念として殘る
塔形の太鼓堂は懷かしい。
寂色の大太鼓は頂上に藏はれて
嘗てお城の人達と町の人々に
『時』を報らせたといふ太鼓堂
いま深き『時』の底に沈む。

あらゆるものは『時』の表れであり
『時』はあらゆるものに麝香のごとく沁み入りて
あらゆるものは『時』に閃めきて震ふゆゑ

刹那刹那の尊い鼓動は私の裡に流れ
また私の生命を漾はす美しさよ。

太陽は青空にためいきし
樹立は黒く鋭き形を地に印せば
あらゆるものは光と影を鮮やかに描き
自然そのものは凡て燦として
生ける大いなる時計の歩みをつづけ
蔦かづら赤く燃える崖に
山雀の啼く音も時を打つ金鈴か。

おゝ古き白堊も龜裂れて
過ぎし封建の夢に耽り
蒼白き『時』の幽靈のごとき太鼓堂

輝ける日に向ひ啜り泣く

——伊達安藝の城址にて——

沼のほとり

空晴れて風もない早春の
大きい沼のほとりは和ぎに溢れる、
雪消えの畑に麥はわづかに青く
通りかかつた赤ら顔の二人の娘は
どこかの泥濘に踏みこんだらしい下駄を手に
泥の跣足で
不思議さうに私を見送る。

沼は嚴冬を過ぎた面影を
黑き枯葦の群にのこし、
今は柔らかく光をうけて漫々たる水

澄みもせず濁りもせず
岸に繫がる一つの古い小舟は、
石斧や矢の根石で生活した頃の人を待つかのやう、
ひろびろした沖には
無數の鴨が靜かに樂しさうに
松かさを散らしたやうに小さく浮んでゐる。

この沼のほとりは此の冬に
やうやく新道が開けたので
どこか原始の匂ひがある、
斯うした路を心のどかに通るのは
純なる祈りの喜びである。

古風な機織

四月の晴れた午後
故郷に着いたばかりの私は
家の二階に唯ひとり
旅疲れを休めてゐる、
山里の古驛の透明な靜かさに
華やぐ春の日は徐ろに傾いてゐる。

古びた障子を透いて
春の日は黄金色に映つてゐる、
思ひがけなくも、たんたんたんと
向ひの家の二階から

古風な機織の音がきこえて來た
鈍い圓味ある音で
この明るい午後の古驛の
心臟の鼓動のやうである。

機を織つてるのは誰だらう
私の知つてるどの娘か主婦か
何といふ運命的の音であらう
その音のまにまに
明るい黄金色の日影は
微妙に幾らかづつ障子を移つてゐる。

遠い幼年から今まで
私の心の一部となつてゐる思ひ出ふかいこの二階に

思ひかけない古風な機織の音をきけば
涙ぐましい靜かさである。

たん、たん、たん、たん、
いつまでもいつまでも機織る音がする、
日の沈むまで止めないのであらうか、
その音の合ひ間に
光の鳥の囀りか
やさしい朗らかな梭の走る音が
輕くかすかにきこえる。

新しい笛

地主

まつぴるま
小作人の平助は
厩で馬の糧切りだ
大きな押切りの音が
　　ザックン、ザックン。

ふところ手の地主が
ひよつくらやつて來た
中ぶとりの顏がほろ酔きげんだ
平助は見て見ぬふりした。

平助の鼻は縹緻よし
地主はないない可愛がる
今日も障子の破れ目から
地主の來たのを覗いて見たが……。

平助は默つて
厩で馬の糧切りだ
大きな押切りの音が
　　ザックン、ザックン。

やがて地主は歸つて行く
平助は見て見ぬふりした。
平助の鼻は圍爐裏ばたで

鬢のほつれをかきあげた。

まつぴるま
皐月の空は青い
畑の麥穗もくすぐつたくそよいでる
軒端で鷄が
　　コケコッコー

『地主の機嫌は取んなげねえ
地主に憎まれりや
神様に憎まれると同じだあ。』

いつものことだが平助は
暗い顏してぼんやり默つて

厩で馬の糧切りだ
大きな押切りの音が
ザックン、ザックン。

暗い家

従妹のおりんは
畫も暗い
小さい家の窖のやうな中
横臥になり添乳をしてる。

土間の竈には柴火が燃えて
味噌にする豆が
大釜にぐつぐつ煮えてる。

背の高い黑い牡鷄が
牝鷄を二羽つれて

土間に遊んでゐたが
湯氣たつ釜の傍に來て
豆をつついて喰べてる。

急いで豆をつつきながら
笑ふやうに喜ぶやうに
喉をクウコロ、クウコロ鳴らしてゐる、
『追つても追つてもしぶとい鷄め
嘴を火傷(やけど)するぞ』

小豚も兎も

ブウ、ブウ、ブウ、
小豚は小屋に前足かけて
私に話しかける、
その顏が誰やらに似てる
大根の皮をやつたら
急いで喰べてた
一匹なのに仲間にでも取られるやうに……
喰べ終へるとまた私を見て
ブウ、ブウ、ブウ。

傍の三つの小箱から

兎が何匹も鼻ひよこひよこ
紅王(ルビー)のやうにうるんだ眼で
人なつこくこっちを見てた、
何が欲しいのだらう
何がいちばん好きかい。

小豚も兎も
みんな窮屈さうでみじめだね、
それで一生暮らすのかい
廣い青い原っぱにでも遊ばせたいね
まるで人間の貧乏人みたいだね。

女工の母

工場主から二圓の前借をして
女工の母は
皺くちやの煤け顏で
冬の夕がた工場の門を出た。

左手には棒の先に
古びた五合入の石油罐を下げ
右手には黑いぼろぼろの毛布を抱へ
街の方に買物に行くらしい。

うしろ姿を寂しく見てゐると

ふと振りかへる皺くちやの顔が
笑つたか泣いたかわからぬが
閃めくやうに暗い感じが私を襲つた。

その婆さんの住んでゐる
まだ灯もつかぬ煤けた夜の農家が目に浮んだ
娘の女工は工場で今どうしてるか
若い者さへ仕合せでない世の中だ。

町の停車場で

町の停車場に集つた人達は
思ひ思ひの古びた毛布や外套にくるまつて
汽車を待つ間を
楽しさうに話し合つてゐる、
大晦日も近づいたので
何かと忙がしく町用達に
村々から出て來たのだ。

米は廉く物價は下がらず
米一升に烏賊一疋
木綿の着物一枚新調するにも

米を何斗も賣らねばならないとすると
着るのも食ふのも此の世の地獄
今年の年越はみじめだ。

それでも賣る米のある者は未だいゝが
小作人の身では
一年に食延ばす僅かばかりの米俵を
狹い家の土間に積んで
米を賣らないと金の出場所がなく
どうして年を越さうかと青息吐息。

五郡に亘る果てもない沃田は
今年も稀な豐年であつたが
勞働にも收穫にもいろいろの約束があつて

その村々の農民たちは
（全國の農民がさうであるやうに）
ひどい貧乏に追はれどほし。

社會の制度と運命とを一緒に考へて
在るが儘の悲しいあきらめに
忍從して生きてる人々
雪ふかい酷寒の土地に暮らしながら
みじめな防寒具を漸くに纏つてゐる
この人たちの顏や姿を見れば
哀れな生活全體も眼に浮んでくる。

この人たちはどこへ歸つて行くのか
言ふまでもなく曠野のそちこちに點在する

ランプさへ暗い貧しい部落へ……
それでも愉快さうに
汽車を待つ間を話し合つてゐる。

畑の花嫁

ザング、ザングと馬の鈴
雪消えのころる春の日に
田舍の空に麥畑に
晴れた光に隅もなく
喜び事は知らぬ他人にも知らせつつ
樂しく鳴りくる馬の鈴。

遠見の部落の森かげを
ザング、ザングと現はれた
四匹の馬に乘る人の
華やかな色、黑い影

思ひかけない一群の
近づくままに
目の覺めるほど美しい嫁御であれと
胸をどる。

可哀さうなこの私よ
去年の今ごろ嫁を貰うて
新婚の夢もさほどでなかつたのに
もう子供さへ出來た身は
いま蟲の觸手のやうに熱く顫へて
他人の嫁御のことなど氣にかける。

――お里がへりでがすよ。嫁御が先だから――
私を曳きゆく車夫は言ふ、

乘掛馬に緋の布團
二枚重ねた四角から
地と擦れずれに朱の房搖れて
斜めに乘つてる打掛姿の
嫁御は俯き面はゆげ。

續いて乘つてる仲人嗔は
黑縮緬で地味に納まり、
花婿と仲人はほろ醉きげんで
自分で手綱を取つて騎る、
細い朱塗の酒樽を
擔ふ男もほろ醉きげんで
歩いてあとから御供する
背中でタプ、タプ、酒が鳴る。

嫁御は可なりの不縹緻だ、
ここらあたりの結ぶの神は
田圃や畑にござるのだらう
――さつぱり白粉がのらないな
それに俵端のやうに圓い顏――
車夫はのんきに呟いた
――かうして此處にも夫婦が出來た――
私も寂しく微笑んだ。

ザング、ザングと遠ざかる鈴の音
車夫も嗅を思ひ出し
――この間、五番目の
子供を生んだ已らあの嗅は

產後の肥立がいけなくて
一時は駄目かと思つたほどだが
占つて貰つたら胞の埋め場所が
艮神樣の方角に當つてるから
別な處に埋めろと言はれ
今日、出るさきに胞を掘返したが
土が堅くて三十分もかかつた――
と汗を拭き拭き走つてる。

ザング、ザングの鈴の音も
風なき光の果に消え
ゆくてに擴がる沼のいろ
ただ何となく世の戀や
里に待つてる妻のこと

生れて間もない赤ん坊のことなどが
明るく悲しくなつかしく思はれて
どこやら雲雀が啼いてゐる。

雪の日の嫁御唄

『東京では櫻が咲くといふに
これはまた何といふ大雪だ、
明け方から降り出して五時間足らずに
もう六七寸も積つたらう。』

『この邊では枝割れの雪と言つて
樹の枝の裂けるやうな大雪が降らないと
春にならないんですつて
この雪がさうでせうよ。』

雪は降る、降る、

大雪もさすが春めいた輕さで
庭園のさまざまの樹立に形おもしろく積つた
うつむいた竹藪はときどきびつくりしたやうに雪を落し
雀等は寒さうに啼いてる。

『おや嫁御唄がきこえますよ』
『嘘だらう、こんな雪の日に誰が……
おまへは去年の婚禮の夢でも見たんぢやないか』
身ごもる妻に言ひながら
炬燵のなかで耳を澄ませば
ほんとうに町のあたりを賑やかに
歌ひゆくらしい嫁御唄。

あやにく雪だがそれもよし

決めた日どりは變へられぬ
雪に風邪ひく嫁ならば
要りませぬとでも言ひさうな……。

えつさえつさと雪踏んで
唄おもしろく身も輕く
簞笥、長持かつぐ人、
溫かい人の情に圍まれて
嫁ぐ少女はどんなのか
見えぬも嬉し嫁御唄
雪ふる中を遠ざかる。

丘邊

村いちばんの財産家
村いちばんの因業爺の
盛んな御葬式だ。

八十を越してからは
信心が深くなつて
坊主になりたいと言つてた位で
この間ぢうは中山法華寺に居たが
村に歸つて一週間目で死んださうだ。

――法華寺に行つたのも

罪滅ぼしのためさ――
と村の人達は噂したが
爺のために不幸に泣かされた
澤山の人を考へて見れば
いくら團扇太鼓を鳴らしたところで
よしんば死んだところで
爺の罪は無くなりはしないだらう。」

桑の木や南瓜や豆の葉の繁る
畑に隣した丘を切り拓いた
だんだんの平地に
粗末な古い墓がたくさん並んで
この新しい死人の仲間入りを眺めてゐる。」

墓穴のあたりには金紙銀紙の蓮華の花などが並び
村の坊主は線香の匂ひに咽びながらお經をあげてゐる
會葬の親類緣者はそちこちの墓の間にやすんで白扇をはたはたさして
ゐる。

空は晴れて日は熱く
丘にはいちめんの短い夏草が茂り
墓地への細路も寂しく埋れてゐる。」
葬式を見ての歸りの子供が
この丘を駈け下りながら
あは、は、は、と笑ふ
無心な柔かいその聲が
死の丘の麓に響き渡る。

蟬

夕がた一雨した
そのあとで蟬の高鳴くことよ
甘露！　甘露！　と喜ぶのか
薄暗い黄昏の世界に日を惜むのか
おぼろな樹葉の踊りの蔭で
おゝ汝等の刹那のいのちの音樂
何といふ晴々しい憂鬱、無邪氣な勇敢。

そして私の幼年時代から變らぬ蟬のこゑ
聲の微妙な類似
私の遠い生のつらなり

いま鳴いてゐるのは何年まへの
何處のどの蟬だ！

夕立

夕立だ、夕立だ、
おお田園を鮮かに一掃する
あらゆるものの天と地の歡喜
山をこえ、川をこえ、野をこえゆく
雷を伴ふ大きい足どり。

瀧なす雨と轟く雷の中を
作男の鶴治が鍬をかついで田圃に駈け出す
稻田に水を入れるのは今だと駈け出す
雨のなかを雷の下をまつしぐらに
鍬を閃めかしてかける。

雷だつて落ちまいよ
いつしんにかける鶴治は
まるで田圃の神様！

都市哀歡

匿された春

雪ともならずはらはらと薄寒い雨
何かしらやるせない哀話のやうに胸に沁む
二月すゑの雨は地を隈なく濡らす。

薄明るい夜の軒端に紅梅の花は腐り
やや温まる室内に
緑色の小時計は輕く時を刻み
こまかく嘆く夜の雨。

濡れ濡るゝ大地は
凍傷と暖氣とに疼くけはひ

深い泥を釉藥のごとく流し
春はむづかゆく普ねく潮のごとく
目覺めくる。

限りなき情熱に期節を染めゆく
微妙なる生のつらなりよ
何處となき薄寒き中にも
匿された春は處女の息のごとく
惱ましくほのかに吾が頰にかゝる。

おおそはわが室内の
燈火の物懷かしき匂ひにも知らる
外の面の雨の音も今は優しく……。

發生

早春の大地
その肉體は力溢れて優しく
感覺は極めて微妙になる、
一塊の土にも溫かい重い生命が籠つてゐる、」
まるで性に目覺める女のやうな
この光彩は何處から湧いてきたか。

青い草は光るやうに一せいに萠え出て
ヒヤシンスの丸みある芽、紅い芍藥の芽
雪に傷められた薔薇の細枝にも芽が輝く、
見てゐろ

何といろいろなものが大地から躍り出て
大地に頬ずりするやうにして
匂はしい蒼空の光に喜んでゐるか。

おお大地の
何といふ精妙な魔術
正しい陶酔であらう
大地を豊かに飾るもろもろの草よ花よ
私を豊かに飾るもろもろの草よ花よ。

風と共に

眠らうとする静かな私に
春の夜の外(そと)ふく風は
あわただしく響つよく
何時からとなく荒(すさ)んでゐる

ああ風よ
かうも温かい懐かしい夜に
その音は私の魂の
遠い果てまでも吹きつける。

ああ風の象(かたち)が明かに目に浮ぶではないか

新月あかるき夜に櫻の花を亂れ散らして
あらゆる樹々と草と
美しく柔かく煙る大地の絃を
果てもなく打ち鳴らしゆく……。

果てもなく嘯く風の寂しさは
人類の持つ或る底ふかい寂しさか
また家ちかきカタリ、コトリ、の物音は
生けるとなき死せるとなき
或る親しい人々の心であるか。

かかる春の夜に埋れたる暗き寢床に
私ひとり風と共に目覺めてゐる。

鶯

ホーホケキョ、ホーホケキョ、
鶯が啼いてる、
はや春に馴れて滑らかの節まはし、
あらはな庭の樹立を見渡しても
どこに居るか姿は見えない、
きつと椎の樹の繁みのなかであらう
毎朝そこで啼いてるらしいのは
巣があるのか
それともいゝ隱れ家なのか。

なんといふ可愛い聲だ！

春にふさはしい光と溫かみとの聲、
よく聽けばそれは一羽ではなく
別々の聲である、
聲音がどことなくはつきりして
語尾がぴんと響くやうなのは雄だらう、
弱々しく艶めいて語尾が朧ろに答へるのは雌だらう。

この二羽の鶯は
巣をまもる夫婦者とか、
さまよへる青年と處女といふ風に思はれる、
かはるがはる啼き合ふその聲音につれて
微妙な感情が流れる、
人間と共通な最も純粹な愛といふやうなものが溢れる。

大地のあらゆるものが芽ぐみ
未だ櫻咲かぬ頃の
春の無言の力と聲は尊い。
ああそれらの上に自由に朗らかに啼き合ふ鶯よ、
私は微笑んで聽く
夢みるやうに和らかな天と地も亦
それを聽いてゐる。

蝸牛の子

いつも水汲む手桶を
時たまに日に乾すとき
濡れた底にいつとなく育つてる
小さい蝸牛の子が三つ四つ居た。

殼は薄く小さく泡のやうに光つて
雀の眼ほどもあるかなし
しかも中から微かにのぞく身はほのか
その先に角さへ二つ附いてゐる。

蝸牛の子に何の不思議もないが

私にはしみじみ面白い、
さて、ちよいと拂へば
地面のどこへ消えたやら見當らぬ。

顏を近々と地面に寄せると
咽せるやうな日の匂ひ土の匂ひ
盛んに萠える青草の明るさ
羽蟲の呻りは賑やかに
またせつせと歩いてる蟻の群
今まで氣付かぬいろいろの活動が
鮮やかに精細に目に映る。

私の知らぬ無數の物の生息する
果てもなく豐かな地上よ、

おお吾が身邊の尺土にすら
かくも湧き上がる神祕が燃えてるではないか、
いま落された蝸牛の子の一つは
泡のやうな小さい殼を日に光らして
微かにどこかへ匍つてゆく。

美裝せる傴僂女

初夏の街で
電車に乘らうとする妙齡の傴僂女を見た
顏は美しく汗ばんで
しつとりと光る裝してゐるが
それらが一層痛々しく
傴僂を引立たせるに過ぎない。

何といふ業病であらう
どんな療法を施しても
おそらくこの駱駝のやうな畸形は
一生癒ることがないだらう。

この運命的な悲しみの深さを
私達も頒たう
私達の心も亦傴僂のやうに歪んでゐる
社會も亦傴僂のやうに歪んでゐる。

何と美しげに此の社會は裝はれてゐるだらう
曲り歪んだ脊骨を下に隱して……
ああ美しいと見るか傴僂女を
幸福と見るか傴僂女を
世のエピキュリアンよ——。

おとうさん

——おとうさん、おとうさん、おとうさん——
ゆるやかに子守唄のやうに節つけて
子供をおんぶした若い奥さんが
門の外で無心に歌つてゐる、
子供といつしよに、
夫の勤めがへりを待つてる
晴れた夕がたの中空に
圓い月が白く
まだ光らないころ。

この歌ごゑをうしろにきいて

私は郊外の丘を下りる
六月の樹立の青々とした茂りは
家々を靜かに飾る溢れるいのち、
果てもない丘陵と平地のうねりの上に
此處から群れ連なる大都會、
おお二百餘萬の人間の生活の都よ。

私を微笑ませるあの單純な子守唄よ
なんと澤山の『おとうさん』が此の都に
皆それぞれの暮らし向きに住んで居ることだらう——
そして私もついこの間
新しく『おとうさん』に仲間入りをしたのだ。

妻に待たれ子に待たれる其等の人達は

蒼ざめて疲れて家に歸つて來はしないか
みじめな屈從に日常を暮らして居はしないか
おおその大多數は何物かに虐げられ蹂躙されて
慰めなき社會の中に人生を素通りして
死の國に惶しく叩きこまれて行くやうな氣がする。」

いま此の丘を下りながら
人間の運命的な相互關係
悲しいそれぞれの連環としての
見知らぬおとうさん達を其の家庭を
寂しくもなつかしくも思ひ浮べる。」

暗い雨季

美しい太陽の黄金の匂ひを
この地上は久しく忘れた
樹林の青ぐらい葉が
かぶさり合つて幽かに震へる
曇と雨と風との織り交る
日本の暗い雨季。

ぶよぶよした郊外の地面に
地ならしも碌にしないで
急ごしらへの家がそちこちに建つ
魔術で浮び上がる茸のやうだ。

そんな家でも
或る人々は美ましさうに見て通る
或る人々は『もう借り人が決まつたんですか』と
組立さへ出來ぬころから隣近所に訊く。」

多數の人は家を持つてないのだ
萬物の靈長の有難さは
よしんば小さなぼろ家にしても
狐の穴や鳥の巣のやうに
さう誰でもたやすく
自分の住家を持てるものでないのだ。」

じめじめする暗い雨季にも

とんかんとんかん音するのは
蒼ざめた日本の首都
東京の持つ都會病の一つ
新しい安普請の家が
葦のやうにそちこちに生れるため。

産聲

ながの雨の晴れたあと
深く濡れた地は日光を受けて
輝かしい歡びに快く喘ぎ
樹木も草も一切の鳥、獸、昆蟲も
迸しる力を閃めかし、
空は奇蹟によつて病の癒つたやうに
光につつまれた青空を煙らす。

おお靜かな午前十一時の
刻々の明るい歩みは輕いワルツか、
そのとき私は急に湧き起り

柔かく搖れる赤兒の泣聲をきいた
赤兒が生れたと直覺的に信じさせる聲だ。
それは草原を隔てゝ
いつもミシンの音のきこえる
よく夫婦喧嘩をする家からだ。

――ミシンの家では赤んぼが生れたね――
と私が言ふと妻も快(こころよ)く泣聲に聽き入つて
――あ、さうですよ、きつと。あすこのおかみさんは
大きいお腹(なか)をしてゐました、まあ可愛い――。

赤兒はまたしても泣いてる、
鬱陶しい曇と雨の大地が
生れ變つたやうに晴れやかに輝くとき、

今日、かういふ時に產氣づくものと見える。
――いゝ時に生れたね――
私は暗い家に生れた
見知らぬその兒を悲しくも祝福する。

そして自然のあらゆるものは
この一瞬(しゅん)ひつそりと息をひそめて
赤兒の泣聲を耳澄まし聽いてるやう
輝かしい靜かさが凡てに行き亙つてゐる。

都會

夏の明け方
さはやかな靜かな大氣の中を遙かに
ねざめの私まで
そちこちの工場の笛が鳴る。

まるで生きものが吼えるやうだ
生活の合圖の雄々しさ
おお聳え立つ大小の煙突
そのめぐりに擴がつてゐる都會が目に浮ぶ。
都會そのものがまるで謎の獸、

年ひさしく育つてきた疲れ知らぬ不死鳥（フェノックス）、
その四肢は地を嚙み
翼は高く天に鳴る。

おおまた都會そのものは
日の下に爛れかゞやく惱ましい巨大な蜂窩だ、
人々は焦色の蜜蜂のやうに其處に出入りし
私もまた歡びにふるへ悲みによろめきながら
わが生を讃仰する。

おお健やかに育ちゆけ大きくなれ
謎の獸、不死鳥、巨大な蜂窩
私の眺めてる、住んでゐる
都會、都會。

光の底に

黑い小さい哀れな生物の私は
都會の崖を攀ぢのぼり
眞夏の晝に
丘も汗ばむその上から
光の果てを眺める。
おゝ私の今見るのは
茫漠たる大都會が
平野に延びゆく一部に過ぎないけれども
盛んな惱ましさは心を打つ。
崖下の停車場の

荒い喘ぎ、煙の濁り
絶えず發着する汽車や電車は
禿げたやうな停車場の廣場の
幾條かのレールの交錯する處に
錆色に續く家並の左右から
次々と現れたり隱れたりする。

生けるごとく朧ろに疲れた都會よ
それと知られる建築の大工場や
一きは高い灰白の煙突やは
凡て薄濁る光の底に喘いでゐる。

おゝまた憂鬱なそれらとくつきりと境して
まるで押し寄せるやうな

平野のいちめんの青草が
明るい原色の快さで日に燃えてる、
おお都會と對照する新鮮さよ
廣々と萠え上る驚くべき力よ。

青草のなかにも澤山の人が動いてゐる、
遊んでゐるのか働いてゐるのか
此處からはよく判らぬけれども
いかにも清々しい平野の樂しさに
人々は耽つてゐるらしい、
都會も深いアブノーマルな歡喜に呻つて
澤山の人を容れてゐる、
崖下の停車場はいつも急がしさを續けてゐる。

見よ鮮やかに燃える平野と
憂鬱に煙る都會と
魔睡のやうな深い美しさで
まるで齒車のやうに互に喰ひ入つてゐる、
そして煙と塵とに朧ろに霞む彼方に
都會の中空に支へられた圓い巨大な瓦斯タンクは
まるで海の底の不思議な巨鐘のやうに
眞夏の光の底に
鳴らざる惱ましさで沈んでゐる。

日の出前の死

向日葵の眩しく搖れ咲くころ
朝露に濡れた夏野のなかに
黑い二つの人力車の幌が
とつぷりと光るやうに置かれてゐた。

傍らの踏切を靜かに圍むは
白服の巡査二人と和服の紳士と
草刈る男と線路工夫と車夫と
いち早く集つて來た虻や蠅の唸り
何も知らぬげに飛んでる胡蝶の閃めき。

私は其處に一人の人間の死を見た、
土と血にまみれて横はつてる小倉服の若者を見た
莚の上に空に向かせられた顏は
まるで骸骨に血を塗つたやうに
赤い死の假面のやうに擦りむけて
しかも露はれた灰白い腹は
時々ためいきのやうに微かに波を打つ。

――明け方の三時の貨車にかかつたのだ――
草刈る男は土手の上から見下して呟く、
三時から今まで斯うして死にきれずに居るのか
この若者の持物だといふ洋傘と麥稈帽子とは
叢の中に寂しく殘されてゐる。

検察醫は若者の胸を指で叩いたり
聽心器で遠ざかる生の暗い響をきく、
錆びたブリキ鑵に車夫の汲んで來た水は
この世から若者への哀れな最後の贈り物。

検察醫と巡査とは若者の服裝等を
その職務の手帳に付けはじめる
ポケットには燐寸の箱と敷島の空き袋
釦をはづしては『縮みの股引』などを付ける。

やがて胸のポケットからの手垢じみた手帳は
若者が野の果ての軍器工場の職工であることを
市内の或る町に住む者であることを示した、
おお朝から晩まで働いて

その上に遠路を往復したらしい若者よ
夜業の歸りか朝出の途中か失業の悲しみか
かくも樂しかるべき人生に永遠の左様ならを告げて
惱み深く死によろめき行ける若者よ。

死を以て現代の勞働生活の苦しみを訴へた若者よ
暗い人生の日の出前の幾多の犠牲者の其一人よ
あゝ是は若者の力の弱かつた爲めのみであらうか
單に若者一人の死であらうか。

今にも若者の妻が駈けて來さうに思へるけれども
これらの傍觀者や虻や蠅の外は
誰も若者を見舞ふものはなく
いつしか日の光は痛々しく若者を照し出した。

検察醫も巡査もその職務を終へて
この路傍の變死人の側を今立去らうとしてゐる、
草刈る男は草刈りを始め
線路工夫は時間を無駄にしたことを悔いるやうに
鶴嘴を勇ましく振つて働き始めた。

秋夜の幻覺

秋の夜ふけに
獨り眠ざむれば、
深い靜かさに心冴え
冷えわたる屋外の大氣と草木の
光るやうに露に濡れてる呼吸が
室いつぱいに擴がり、
星空の下に野原に
髪も露にびしよ濡れてまろ寢してるやう。
蟋蟀はたえだえと
私の魂と隣り合つて啼き

都市哀觀

都會も物音を全くひそめ、
何といふこともなく
充ちわたるこの世ならぬ恐怖の
寂寞の中にたゞ獨り。

幼いとき身にしみて聽いた話の
過ぎし日露戰爭に
前額を敵彈に射貫かれて一息に
異鄕の丘に死んだ隣村の若き少尉は
この私であつたらしい。
痛みもなく血も流れず
魔睡のやうに死んだのかも知れない。

『戰爭は恐ろしい！』

永久に死んだ私は
とりかへしのつかない深い嘆きの中に
頰ぬらし涙を流す。

わが暗い室の
死とも生ともわかぬ意識の上に、
星の群が蒼ざめて大きく光り
蟋蟀の啼く秋の夜ふけ。

落　日

多深い夕がたの
どこか紫めいた薄暗さに
凍えた大地から生へてる樹立は
皆一つ一つ溫かい情緒をまるで人間のやうに枝の尖まで行き亘らして
街の屋根屋根は柔かく夜に抱かれてゆく。

その時、私は思ひがけなく
とうに隱れたとおもふ落日を
かなたの森の上に見る、
枝もあらはに空に浮彫されてる樹立らの上に
間(あひだ)に隱見する幾つかの建物の上に

落日はまるで永遠の一點に止まつたやうに
描かれた赤い全圓をもつて燃えてゐる。

地は暗いが空はまだ明るく晴れて
おそらく落日は何萬年の間にも
一度も繰り返すことのない異つた美で
今日もこの環境の中に燃えてるのだらう。」
戰の鮮血
愛の眞紅
重くもなく輕くもなく
或る諧調をなして存在してる落日。

これは自然の凡ての力を以てのみ表はすことの出來る美だ、
かうした燃える壯嚴さはこの世に二つとはないものだ、

澄み切つた寒冷に磨かれた美だ
温かい光を孔雀の羽のやうに收めて夜の中に凍えてゆく美だ、
此處からは見えないがその直ぐ下には
雪に掩はれた富士や連山が暗紫に翳つてゐるであらう。

漂渺たるものよ
落日よ
空のはて、地のはてに煙る
人間の一切の苦惱と歡喜よ
和やかな人間生活の祈りよ。

途上の禮拜

途上の禮拜

この街道を行く旅人のうち
氣付いた人もおそらく
ただ美しい泉ある凉しい樹蔭として
何の氣なしに眺めて通るであらう。

溪流は山地を出て來て
ごどごどと絶え間ない水車を廻し
目ざめるばかりの清さで路を横ぎる
その岸には小さき十數基の古い地藏があり
老樹が露けき綠蔭を作り
滾々と湧く一つの泉があり

人々が掬するための椀を備へてゐる。
路傍なる其れ等の地藏は
作られたるものといふよりも
地と同化した心に寂びて
氣儘な向き向きに居り
仰向けに倒れたままのもある。
或者は鼻が缺けてユーモラスな様子となり
或者は薄地の青苔を纏つてゐる
或者は蔦蔓の葉の鮮やかな唐草模様を肩にかけてゐる
或者はその背に願主の名を刻み
或者は朽ちた麻絲を何本も身に卷いてゐる。
其處を通る村の人達は

野菜車などを置いて樹蔭に憩ふ時に
また一椀の水を飲む前に
先づ必らず幾椀かの水を
地藏のどれかに注ぎかけるのである。
泉の水を飲む感謝を『自然』に向つてするのであるか
涼しさの歡びを地藏にも頒つのであるか
不幸なる見知らぬ世人への施しであるか
自分の心そのものを洗ふのであるか
この街道を往來する人達によつて
かはるがはる水をかけられた地藏は
いつも樂しく濡れてゐる
素朴なる人の美しい心のやうにいつも濡れてゐる。

私はまた傍ちかい丘の上の
廢れた地藏堂を見た、
扉は毀たれ内には何にもなく
板敷の上に莚が一枚敷いてあり
今まで誰かままごとをしてたらしい草の葉や
貝や玩具などが散らばり
奥には本尊であつたらしい木彫の地藏の
古く朽ちた頭が臺の前に轉げて
こちら向きに泣き笑ひしてゐる
後ろの板壁に誰かが白墨で
その代りの似顔を手際よく描いてある。
樹蔭の石地藏たちも
おそらく始め地藏堂に置かれたのであるが

いつとなく自然の心そのもののやうに
村人の手によつて移されたものであらう。
この偶然ならぬ出來事に
私は限りなき微笑を感ずる。

かくて自分等の仕事の途上にも
おのづから禮拜し得る村人の喜びは
やがて地藏たちの悅びであり
いぶせき茅ぶきの御堂を出でて
日と月と星とで飾られ
雨や風に生氣づけられる青い露天の下に
埃たつ街道の傍なる綠蔭に
地藏たちは親しみ深く
此の土地と村人とに同化した心に寂びてる。

高原

夏草に掩はれた山と山の
隣り合ふ永遠な立體的の感じ、
山には人間の呼吸や鎌の光が
ほどんとはひらないやうに見える、
桔梗、女郎花、撫子、葛の葉などが
昔からの自然のままの盛りで
清らかに豐かに
光と大氣のなかに咲いてゐる。

しかも山と山との間の平地をたづねて
草に埋れがちの細い路があつて

遠い澤合の林の中に消えて行く
寂しい部落と部落をつなぐ線よ
眠たいほど靜かな生の鼓動よ
人の足跡によつて稀に踏まれてゐる路は
ほのかにも懷かしい。

ああ誰々が通つたのか
かなたに人は住み人は往く
見知らぬ人達の幻は浮ぶ、
音もない山と山の
美はしい力は
青空のもとに遠くまで續き
私を醉はす。

湖

眞夏の夕がかりたる光の中に
湖は深げに遙かに
溫かくも冷たくもなく
廣大なしかも限られたる虔ましさに
藍色に煙つてゐる。

嘗て火を噴いた山はかなたに
駱駝の膚のごとく滑らかに
鮮やかな輪郭を晴れた空に現はし
新しく拓かれた國道の傍に
ほうけたる芒は日に搖れて

明るい雜木林の下に蟋蟀が人知れず啼き
古びた墓石と茅ぶきの村落と。

おおこれらの諧調のなかに湖がある、
數十ケ村が噴火に全滅して湖となつたといふ
傳へられる遠い自然の慘禍
ひどく打ち挫かれながら
絶えもせぬ人間の繁榮
おゝ湖の無言の深さよ。

その靜かさは人を醉はす
餘りにも人のけはひがないので
湖を遠く漕ぐ一つの舟の
音もなく影も朧ろな辺りは

どこか死の島へでも漕ぎゆく感じ。

おお湖の湛へられたおもひは
明らかに生から死への窓……、
森には聲太き山鳩が啼いてゐる
夕日に向つて
湖に向つて
自分自身に向つて
また一切の過去の人間に向つて
道化者の祈りのごとく
しかも人生の喜びを讃へながら……。

森林

仰ぎ見る山は夏の豐かな飾りの
綠の密林に掩はれて
年久しくしかもときどき踏まれる小路は
私が獨り攀ぢ登るときに
嶮しく盛り上がる地肌に觸れる喜びを
心身の隈々まで感じさせる。

朴、欅、栗、樅、柏、松、杉等の數知れぬ樹木の青葉
眞夏の烈日の濾されてくる新鮮な薫り
笹などの陰濕な下草、
充ち亘る輝く明るさ、野生の力は私を衝く。

おゝ眞晝でありながら
この中を攀ぢ登るときに
ますます深まるこの恐怖心は何であらう、
太古から相繼いで樹々の釀した神祕な生活
其處に棲むさまざまな鳥、獸、昆蟲、蛇のたぐひ、
それらに今自分は壓倒され
五官は極度に鋭くなる。

聖者や苦行者はこの恐怖心を打ち越えて
人生の尊い核心となる何物かを
宇宙の心を山岳の靜寂に求めたのだ、
樹の間を透いて見える麓の田畑や
銀色に薄光る川やそちこちの家や

その中に生活するときに忘れてたものを
個々の價値を明らかに認識する、
溢れる愛が熱くなつかしく萬物に呼びかける。

薄暮

初秋の曇り日の
暮れ早いたそがれに
奥ふかく人氣なき杉林のなかに。

伐り倒された杉の木は
皮剝がれたる生白き光りに
幾筋か亂雜に横はれど
なほ靜かに薄暗い杉林。

一日の仕事を終へて憩ふ
數人の勞働者の前に

一人の男もまた杉の木に腰かけて
帳面を繰りひろげてゐる。

ひつそりと無言なる彼等
一日の賃銀の計算か
密にして原始めく杉林に
あまりにもふさはしからぬ帳面の閃めき
一人は與へ他は貰ふその差別。

稲の穂

桃われの十四五の少女
荒い紺絣にメリンスの帶しめて
汽車の窓から廣々とした青田を眺め
『もう稲の穂が出た』とうれしげに言ふ。

自分の村の稲と心の内で較べ
かゝる事柄に限りなき新鮮さを感じ
見知らぬ私の傍に妹のごとき親しみで腰かけ
獨語とも話しかけるともなく言ふ田舍少女よ。

手荷物もなき田舍少女の小旅行.

家に歸つて彼女は
何よりも先きに
旅で稲の穂を見たことを語るらしい。

湯女

――お月さまさへ夜遊びなさる――
溪流に添うた溫泉地の
深山の上に出たまんまるい月の下で
太鼓と笛の音につれて
若く美しい彼女等は歌ひながら踊る。

そこに『過去』『未來』もない
また考へることは無駄だ
たゞ醉つて踊る『現在』があるだけ。

紙幣と引換へにこともなく異つた男を抱く彼女等

淫亂で嘘つきで酒を呑み煙草を喫ひ
中途半端に虚無的で
浮世の樂しみに溺れ易い彼女等は
今宵、色褪せ易い蝶のやうに夜ふけまで踊る。

おお人生の淫蕩な踊り子
私は彼女等の生活を最上のものとは思はない
けれどもこの世で
果して何物が眞に正しいか
どんな女の生活が私にとつて讃嘆に價するか
世の女はあまりに私に沒交渉であり
人生は情に渴いたものであるゆゑに
私はこの美しい踊り子に十分に心惹かれる
その肉體と心とを知らうとする

飽くなき好奇と微笑の幸福を感ずる
彼女等を憫(あは)れみながらもその存在を祝ふ。」

桃賣る娘

貧しい農家の前に
清い小川があり
飾りなき幼き姉妹等はほほゑみ乍ら
橋のほとりに戸板を据ゑ
十數の熟したる天津桃を並べて
炎天の下に商(あきな)つてゐる。

農家をめぐるいくらかの畑中に
桃の樹が數本あつて
いましがた少女等は桃の樹に攀ぢ
びろうどの如く輝く葉蔭に

かつと笑む眞赤き桃の實を取つた。

桃の實は戸板の上に
黄金よりも重く
ただちに割れて
芽ぶかんとする艶を帶ぶ。

こゝにして商ひも神の言葉のごとく
桃の實は
ただちに旅人の靈の糧となる。

祭

かなたの森かげに明るい灯を連ねて
にぎやかな太鼓の音がする
町はづれの特殊部落の祭だ。

しつとりと露が下りて
東の山にまるい月が
濡れたやうにじんでのぼり
稲の花がしづかに薫る夏の夜ふけ。

かゝる美しい夏の夜ふけに
呪はれた部落の老若男女の集ひよ

その祭よ
遠くに見て過ぐる私はその光景を知らない
しかもその太鼓の音が
哀樂を超えて賑かに響くだけ一層いたましい。

呪はれた血族の遠い祖先の不幸を祭つてか
また虐げられる彼等が
吾等と同一の源から分かれきたそのユートピアの時代を憧れてか
おお嘆く者は詩に近く
祭に價する、
悲しき彼等のみの祭は
濡れにじんだやうな圓い月に訴へ
ふけゆく夜に樂しさと笑ひと悲しさを增す。

溪谷の哀愁

深い溪谷の曲折する路を溯(さかのぼ)れば
峙(そばだ)ち合ふ山々に密林は生(は)へ連(つら)なり
不斷に吐く樹々の香は新鮮にして濃く
その遠い奥より躍り出る流は涼しく反響(こだま)しゆく、
ああ心いよいよ寂しく靜かに
現(うつつ)ともなき吾が痛みをわけゆく心地。

この清らさは
人生の曙への路か
眞と善と美との源か
凡ては手に觸れがたき原始の恍惚を以て

私に逼る。

私は生の重き鎖を
影のごとく曳きずり
いま傷める一切の過去を髣髴す。
頭上に限られて輝く青空に
遠い戀しい愛人の幻を浮べ
泡だつ淵に岩魚と共に泳ぐ
茶黑き群童の裸體の光りに
失はれたる少年時の自由と健康を思ふ。

行き行けど求むる物に逢はず
優しき佳き魂に逢はず
ああ寂しい人生の

吾が來し方よ、現在よ、
叢にほのかに咲いた薄紫の釣鐘草は
慰めなき私への哀れな捧げ物であるか。

眞夏の日は此處にしてなほ暑く
それぞれに笠被る百姓に連れられて
峠を下りくる汗くさき四匹の馬の
先だてる一匹はいち早く路傍の泉を見付けて
立ち止まり水の面に口づけて飽かず飲めば
後なるは草などを食み、百姓も氣永に待ち
隨き來れる虻共も暫しそのほとりに饗宴す。

馬は休息の喜びと水のうまさに
心内に獨語ちつつ飲むか、

この光景の前に
私は痴呆のごとく立ちて眺め
慰まぬ心も
呻くごとく微かに笑ふ。

玆に孤獨なる私は
地上の果てもなき人々の生活を想ふ時
常に新たなる溪流の
谷間に反響する聲は踊りつつ嘆きつつ
何處へゆくか遠く私を呼ぶ。

生の序樂

漂泊

解體の露西亞を脱れて
きのふ敦賀に着いたばかりだといふ
美しい露西亞婦人が
やうやう歩けるほどの
可愛らしい少女を連れて
日本の家の玄關に立つた。

少女は見知らぬ家に這入るのを
いやがつておいおいと泣きだした
顔を眞赤にして大きな聲で泣きだした、
金髪のふるへる可愛らしさ

それをなだめる母さんの異國のメロデイ。
やがて二人はまだ泣き止まない
少女はまだ泣き止まない
若い日本の少女は微笑みながら
卓上のチウリップをやると
泣きながら葉をも花をもむしり棄てる。
『もう可愛がらない』
母さんは露西亞語でさう言つて
傍らのピアノを彈き出す、
少女は一層激しく泣いて
母さんの手にすがつて止めさせようとする。

美しい匂やかな露西亞婦人よ
可愛らしい金髪の少女よ
ああ私は君等の位置を
羨みもし痛ましくも思ふ。
遙かなる解體の露西亞を背景として
泣き聲とピアノの音とが混亂して
限りない漂泊の序曲のやうにたゞよふ。

手

『今日は！』

私は握手する
暖かい大きい手
露西亞の茫漠たる土地その物の小模型のやうな手
嬰兒と巨人をつき交ぜた柔かさと力のある手
熊と聖者とを一緒にしたやうな手
大地の心をつかむ手
戰には弱いがより藝術的な手
思想を直ちに實行する手
新しき眞理の爲めに舊い一切の形式を破壞する手

底知れぬ苦惱の試煉に堪へる手、
（其の手にぎゆつと握られると
日本人は猿のやうに飛び上がる。）

おお打ち振れよ
打ち振れよ
その無類の手を、
その大いなる手は
曠野の果てに太陽のごとく輝かうとする。

爛れた眼

おゝ地の癌たる
炭坑の上
秋の日の空は
あまりに青く
あまりに快き魔睡のいろ、
丘に立つ巨大な數本の煙突の
黑煙もただ鮮やかに
照る空を流れ
平地を尋ね這ふ炭坑町は
いたづらに瘡蓋のごとく錆びて
もの靜かな晝。

坑内を出て來たばかりの十六七の少女が
低くむさくるしい長屋の前に立つてゐる、
無心であるか深い疲れか
濕つぽい黑木綿の坑内着を短く着て
石炭の粉に汚れた四肢と顏も露はに
その眼の緣は赤く爛れてゐる。

おお美しく淸らかであるべき少女の眼も
その魂もその肉體の各部分も
ひどく傷められてゐることが判る
(坑内で働く人は眼を惡くするといふ
その地下なる數千の男女の一人よ)
おお不運に選ばれたる此等の人々に

世の誰が共同の責任を感ずるであらう。

人生は流れゆく
爛れたる少女の眼にその姿に
秋の日はあまりに明るく痛ましい、
おゝ事實こそ限りなき哀訴であるが
炭坑町そのものすら
いかにも他所他所しげに靜かである。

南京街

冬ふかき港の街に降る雪は
哀愁と歡びとえもわかぬ蠱惑の
縺れ合へる悲しい踊りを
果てもなく盡くるなく
私の前に續けつつ吐息する。

いましがた埠頭に人と別れ來て
雪の降る南京街をさまよへば、
赤や青の原始めく家の飾りに
窓にあるてかてか光る鳥の丸あげと
赤い美しい織物を思はせる不可思議の獸肉と

猫などの頭蓋めける食用の球根と
彩れる暗い階段などの
祕密の匂ひ、あくどき異國の香。

あるものは底知れぬ洞窟のごとく
妓樓のごとく寺院のごとく、
好奇の心をそそれど近寄りがたく
一切の謎をそれぞれに包んで
雪ふる中に音もなく對ひ並ぶ。

かかる時、或る家の出口に
菫色の支那服着たる六つばかりの女の子
同じ服着たる三つほどの妹をいたはりて
小さなる海老茶色の手套を

睦ましくはめてやり居る其の姿。

親しき人間の共通の心の流れは
ここに見る私の胸にまで溫かく通ひ
雪ふる中に立ちとまり微笑する。
幼き姉妹の可愛き蠟色の容貌と
暖かく膨らんだ支那服の菫色。

野の午前

朝まだき遙かにも家を發ち
胸躍り遠い野に來て
さかんな觀兵式を見ての歸り。

今しがたまで飽かず見し光景の
生々と浮ぶ幻影のうれしさ。
晴れやかの曠野の朝にひびく
朗らかの喇叭の音、黄金の光り、
無數の兵士が雲のやうに
果てもなく秋草ふみて
整然と列つくり歩みくる靴の音、

銃劍の林よ、閃きよ、
號令の勇ましき馬上の將官の尊さよ、
吾等はただ讃嘆した
限りなき人間の美として
力のよき表現として。

時ならぬ賑はひの野の路の
鮮やかの太陽は尙ほ高からず
傍らの露けき黑土の畑に
艶よき大根は青き葉を飾りのごとく擴げ
象牙より白き肌をあらはす。

美しき少女等は
さざめきて私達のうしろより來り

微笑はおのづから私の胸に溢る
おお生の歡びよ。

そのとき私は友達に笑はれるほど
頻りにうしろを振りかへつた、
野の末に觀兵式の幻影をなつかしんでか
清い大氣に充ち渡る太陽の美しさを見んとてか
見知らねど少女等に心燃えてか、
ああそれらの凡てをとりあつめて
そのとき生は無限の希望
戀は樂しく美しい期待。

おお何と遠い少年時代であらう、
今、軍隊は過ぎし童話の國の役割としてのみ樂しく、

事實は陰慘な殺戮者
ミリタリズムの囃子に連れる無自覺な踊り手、
生を空費する痛ましき美々しき道化者。
戀は惱ましい疲勞
妻子は運命的な繫縛
わが永い青春に私を有頂天にする輝きに遇ひもしなかつた。

おおかの日
朝の野に立てる私は
たしかにこの私であつたけれども。

荒磯から

荒磯で拾つて來たといふ
貝の一片を私は貰つた、
手にとつてしみじみと見れば
思ひもかけぬ貝の美が私に觸れる。

その殼の外側の暈された燒色
次第に重なり加はつた無數の層は
貝が年久しい間に粟粒ほどから今の拳ほどまでに
きはめて徐々と成長した跡を示し
その內側は瀨戸物のやうな堅さで
日をうけると虹のやうな光澤を放つ。

おお廣大な自然の竈が造つた燒色の美の味ひ
宇宙の一つ一つが持つ微妙さの表現
おお蒼海の波底に搖られて
この貝が生息した長い年月の
その不思議な生命の旅を
わからぬなりに私は思ひ浮べる。

いつの日か、どうしてか
相均しき二片に包まれた魂の安息所、生命の棲家の
完全な存在は打ち碎かれて
その一片のみ知られぬ荒磯に寄せられた。

おお寂しい貝よ

その生命のゆくへよ
私の手に殘る一片は
それ自身が一つの墓碑のやうに……。

宣　言

私は現實を愛する
よしそれは過去と未來との中に永遠の中に
また吾が理想の幻影の中に
大海に現はれた陸のごときものであらうとも
その姿に不完全や醜汚があらうとも
私が現に五官に感じ心に思考する現實を
永遠に生きる唯一の仲介として
限りなく喜び愛する。

おお現實の中に驀然に進め
現實を回避して空漠たるものの中に

稀薄なる感動に技巧を加へ
獨り自らを高しとする詩人は
鉛の錬金士
生涯ペン、ナイフをも得られまい。

私は現實の土を耕し
永遠の種を蒔かう、
自然の與ふる生ける存在は
美を超えたる美だ、
魔術的の力だ。

愛兒

雪は降る
羽毛のごとく輕く積り
かすかに囁きながら
遠くまで朧ろに煙り
寂しくも賑やかに
どこか溫かく凍えながら……
きよらかのしろがねの夢を敷く、
おお、東北の四月。

毎日、十時頃になると離室に來て
赤ん坊に湯をつかはせてやる

妻の母と嫂との二人は、
けふも大きい盥をいそいそと運び入れ、
沸かした熱湯を手桶に汲んで來て
それに水を加へて湯加減を見る、
妻の母は孫の可愛さに生の樂しさを增し、
嫂は自分も子を生んだ經驗から
輝かしい微笑で世話する、
まんまんと盥に湛へられた湯は
有難いもののやうに透きとほる。

裸になつた赤ん坊は何事も人にまかせて
湯の中の快さと少しの驚きと怖れとに
嚴しいほど眞面目になり、
未だ力と光の足らぬ小さい黑目を外に向けてるのは

この初めての雪降りでも映してゐるか。
初めての寒さにびつくりしてるか。

赤ん坊は一週間ほど前に生れた、
その時はもう河の水もやはらかく輝いて
土堤の青草もしみじみと萠え出て
どこやら鶯でも啼きさうな明方だつたが、
今日はまた近年にないほどの大雪だ、
燃える春を一層耀かしく燃やす爲めの
大地の或る準備、微妙なリズムなのか。

湯加減も何もかも
神にまかせたやうな
赤ん坊の安らかな樣子、

人々は赤ん坊の手や足や
その一々を洗ひゆく毎に
讃めたり笑つたりする
妻も孽からのぞいて笑つてゐる。

大きな盥のまんまんたる湯で
洗ひ清められ、よく拭かれた
世にも軟かい薄紅い赤ん坊の肉體、
赤ん坊はかうして見てゐるうちにも育つてゆくやうな氣がする、
『自然』が與へた生の力と光とは
ただ強く輝かしい成長の方へのみ進んでゆく。

齒

柔かな可愛い下齶に
ほのかに白い齒のただ一つ
芽ぐみそめたる不思議さよ。

微かではあるが
まことに新しい堅さに光り
齒そのものは心の目覺めのやうに
無心なその笑ひに
やや整へる美を添ふ。

思へば遠き

吾來し方よ
ほのぼのと紫に煙る岬のやうに
消え行けるおもひでよ。

われは赤ん坊の口を眺む
廢頽の心身はその前に薄暗く蹲まり
美しきあどけなき龕に祕められたる
微小なる祕佛のごとき齒を眺む。

赤ん坊の笑ふたびに
ほのかなる齒の燦けば
われも聲あげて笑ひ
禮拜す。

蹠

吾が兒は微かなる
二本の齒を持ち
みづから懸聲し、樂しく這ひ
鳩のごとく喉聲に
言葉なき言葉で玩具と語り
友もなく飽くなく獨り
あらゆるものの中に遊ぶ。

おお柔かく輝く成長よ、
まだ大地を踏まぬその蹠は
美しき少女の下顎よりもなだらかな圓みを持ち

溫かく羽二重の艶をもち
絶えず踊るごとく樂しく動き、
ほのかなる新月の形して
何物かを尊く指し示す。

おお人々よ
この瞳の
かかる美しき柔らかさを
いま君の身體の何處に見出でるか。

新月

まる一つになつたばかりの吾が兒は
庭に立てる子守の背の上で
『あァー　あー』と抑揚も美しく
湧くやうな歡聲をあげて高く指さす。

指さすかなたに何があるか
高き椎の樹の若葉のそよぎか
どこかに飜る旗であるか
私は微笑みながらもその何であるかを知りかねたが
吾が兒の眼に止まるゆくへを見れば
五月の暮れがたの空に

あざやかな新月が出てゐる。

ああ、あんなに遠いのを見つけたのか
いやあんなに清らかに輝いてゐるので
近いものよりももつとよく眼に映るわけだ、
しかもこのおとうさんよりは確かな純粹な眼で
月を見てよろこぶのだ、
嬰兒の魂の上の新月よ、
この若葉の薫る庭で
私も共にしばし新月を仰ぐ。」

地の叫び

國境の上に

何の國境あるか
雲のゆく處に、風の吹く處に
光の溢るる處に、潮の鳴る處に
土地そのものに何の國境あるか、
彼等はただ稔りただ與ふ
おお夥しい宇宙の饗宴よ
彼等は均しく歡呼し永久の平和にある、
人々よ、この限りなく美しい樂音を聽け。

然もおお武裝の世界よ
彼等はその利己主義によつて常に自他を傷つく、

熱なく光なく思想なく藝術なき日本よ
戰にのみ強き甲蟲(かぶとむし)よ
戰にのみ備へて日常生活の自覺なかりし日本よ
矛盾と虛僞に曇る日本よ。

されど私は信ずる、
優れたる國民性の光輝を
その自由と快活とを
一切の虛飾をふるひ落して
潮に洗はれたるごとく鮮やかに飛躍する國土を。

童話の國

春の晝に耳を澄ませば
光に溫まる土のなかに
種子のひび割れる音がきこえる
枝さし交はす樹立はアポローのやうに立つてゐる
鍬の閃きは少女の髮を梳(くしけづ)る櫛のやうだ
大きい蝶の羽の動くたびに
青空は微妙なヴィオロンのやうに鳴る。
農夫の足音は神の足音のやうだ、
光は歌つてる、土は歌つてる、小鳥は歌つてる、
馬は歌つてる、農夫は歌つてる。

おおこの田園に稔る豐かな賜物
繪卷のやうに擴がる饗宴の庭、
ああこの平和な樂園に
突然、惡魔がやつて來た、
今まで少しも働かなかつた此の惡魔は
この樂しい饗宴の人々を睨め廻し蹴飛ばし、
どつかと眞中に坐つて
この賜物をみんな攫つて車に積み込んだ、
そして自分の白塗の倉に納ひ込んで
赤い舌をぺろりと出した、
いつたい彼奴は誰だ
みんなで追ひかけろ
彼奴を叩きつぶせ
倉の扉を自由に開けろ。

田園の恐怖

春の光に
遠い連山の雪が溶け始める
いちばん高い山も藍色に煙り
雪が駒の形を現はす
空に雲雀が歌ふ。
溫かな太陽に地のあらゆるものが答へる
木も草も川も鳥も獸も柔かく輝き笑ふ。

田園の人々よ、
尊き自然の心を愛せよ
嘗て太陽によつて時を知れる人々は

いま銀時計を誇り
露を踏む草鞋の代りに自轉車を走らせ
ダイヤモンドより堅き齒の上に金齒を光らせる
田園の人々よ
おお猿のごとき淺薄と冒瀆の人生觀を脱して
眞に深き自然の健康に參ぜよ。

ど、ど、ど、と遠雷の音して
自動車は田園の路を走り
柴積みて勇み來れる駒は
驚きて麥畑に駈け入る、
ああ物質にやや飽滿して
凡ての矛盾と喜劇との渦まくを見よ
用ふることを知らぬ者にとりて

文明は腫物のごとく田園を病ましむ。

遠い煙

晴れた秋の日の
藍色につづく遠い山脈
おおその一きは高い山の中ごろに
一すぢの煙がほのぼのと昇つてゐる
見わけがたいほど微かな
何と靜かな美しい煙。

何の煙だらう、炭燒の煙かしら
いやこんなに遠くまでどうして見えるものか
それとも山火事かしら
それには餘り靜かで美し過ぎる、

おおあれは鑛山の煙なさうだ、
こゝからは五里ほどの道程だが
穩やかな日には工場の笛もきこえる。」

私は學生時代に
喇叭の音を先だてながら
その鑛山の見物に行つたことがあつた、
驚くべき壯大な機械の運轉
汗まみれになつて働いてゐる無數の男女
深山の中に造られた別天地を見た。

おお今、遠く眺める靜かな美しい煙につれて
あの時分のあの土地の光景が
まるで蜃氣樓のやうに明瞭と

晴れた秋空に浮んで見える、
あのなつかしい喜ばしい思ひ
おお勇ましい不斷の生活の烽火よ。

牧場の蔭

高原の秋晴れて
光と力とに溢れてゐる
おお限りなく續く青草
青草にとりどりの花が星のやう
更に模様を點ずる萩の花の眞盛り。」

高原の一部を劃る
果てしない牧場
幾百となき美しい馬が
誇らしく鬣を振り蹄を鳴らし
空よりも深い眼を輝かして群れ遊ぶ。

おお何といふ自由と健康
然も私が眞に強く心を打たれたのは
牧場のそれではない、
高原の盡くる處
滑らかな斜面をなした靜かな谷間に
可愛らしい小馬と勇健な母らしい馬とが
連れだつて草を喰べてゐる
いかにも落着いて樂しさうで
時折は何か話し合つてゐるとも見られる。

この野放しの馬は誰の所有か
人里離れた斯うした處に
持主は全く安心して彼等を放してゐる

彼等も自己を知り
行く處に行き憩ふ處に憩ひ
草を喰(は)み水を飲む
そして夕がた自ら家路に向ふであらう、

此處には牧場のやうに一定の柵もなく番人も居ない
ただ大氣のやうに普(あまね)き美しい心がある
神のごとき睿智の支配がある
空には白き雲あそび
たかくたかく鳶が啼いてゐる
高原の秋晴れて
光と力とに溢れてゐる。

美しい國

見渡す限りの田と畑と
その中を輝き流れる大河と
遠く起伏する山脈と
晴れやかの青空と
爽やかの微風と
それらの中に立つて
人生がどうして不幸であると思へよう。」

田と畑と一切の自然とは
人間に豐かな賜物を與へてゐる
けれども默々と耕す農夫の鍬の光りに

働いても働いても拔けきれぬ貧乏が纏(まつは)り
裏街を歸つてくる工女の顏は
味氣なき過勞に蒼ざめてゐる。
庭に花咲く平和さうな茅ぶきの農家には
瀕死の病人が醫者にもかかれずに呻いてゐる
妙齡の處女は少しばかりの金で娼婦に賣られ
青年はこの絶望の田園を見棄てて
當てもなく悲しく都を目ざして峠を越える。

おお美しい山河は
あり餘るものを生產しながら
人間を少しも幸福にしてゐないやうに見える、
されば凡ての人が樂しく勞働し生活に歡喜を感ずるようにと
美しい山河の賜物を正しく凡ての人が受取るようにと

ロバアト・オウエンは『協和共力の村』を計畫した、
ウイリヤム・モリスは『理想鄕』を描いた。

おおこれら思想家の夢が
いつ此の世に眞に現はれるだらうか、
晴れた丘の上に立つて
靜かに田園を一望すれば
美しい山河は極樂そのものに見える。
しかも人々の生活の部分部分は地獄そのものである。

土地

土地の持つ微妙な力は
魔術的の美と歡喜である
限りなき惠みである
けれども私は一坪の土地も持たない。」

一粒の種子は土を萠え出で
青き葉をそよがせ花を匂はせて
やがて無數の實を結ぶ、
一木の苗木は丈高く繁り花咲き
年毎に無數の果實をつける
或は草花の種子や球根は

新しい光の中に芽ぶき躍り出で
それぞれの美しい花をつける、
おお吾等の周圍を飾つて
血と肉と心とに休みなく糧を與へる
その燦爛たる眺めよ。

おお土地の歡びよ、
牧場には牛や羊が遊んでゐる
樹立には小鳥が歌ひ光の中を蜜蜂が飛んでゆく
蝶は輕くとび蟻はいそいそと歩いてゐる、
少しばかりの土地をも樂園として養鷄が行はれてゐる
卵の殼を破つて出た雛鳥は
可愛らしく賑やかに親鳥の傍に育つてゐる。

地上に生くる人間にとつて
土地は魚の水に於ける如きものだ、
私は土地の美と歡喜と賜物とを知る
けれども私は今一坪の土地も持たない。

ああそれは私一人の惱みではない
都會に於ては勿論のこと
田園に於ても實に國民の大多數は土地を持たない
地上に生きてゐながら土地を忘れて生きてる。

鐘

丘の上の寂びたる寺院の鐘
それはこれまで餘りに
夕暮にふさはしいものとされて來た。
されど今こそ
吾等の薔薇色なる生の曙の爲めに
力强く響かせよう、
その鐘を力限り撞きながら
吾等の心を一つにして
鐘の音に合せて歌を歌はう、

おお吾等

美しき樂しき地上の子よ、
おお吾等は
餘りに苦酸と屈從とに馴らされて來た、
今こそ地の精神の自由と歡喜とに生きよう、
おお吾等は貧しい
けれども吾等はこの生活にも意義を見出し
涙ながらに讃頌する。

吾等農夫の小屋は天幕のやうに不完全で
雪が吹き込み、雨は零し、風も漏れる、
けれども幸ひに吾等は共れに堪へるだけ壯健だ、
鍬で畑を耕し、鎌で草を刈り
臼で麥をつき、摺臼で粃をひき
水車で米をつく、

それら原始的な動作の面白味よ
人間と共に働く牛よ馬よ
共に生くる犬よ豚よ鶏よ
自然と和合せる生活よ。

吾等漁夫の家は
貝殼のやうに小さい、
けれども吾等は無限に青く躍る新鮮な海を家とする、
木の葉のやうな舟にも神の心が宿り
櫂は黄金のやうに閃く、
魚を漁る網よ針よ、
潮風と波とに鍛へられた裸體の子の
力と美に輝く勞働の精神よ。

吾等は最早や資本家や地主を尊敬しない、
吾等の先祖はあまりにお人よしだつた、
彼等の顏使に甘んじて久しい間、屈從して來たのだ、
もし彼等が吾等に何かをしたとすれば
彼等は吾等から千を奪つて一を與へたのだ。

この失へる有形無形の土地を恢復するために
吾等は眞理のために結束して勇敢に戰はう
人間の一人一人の尊い使命を高調しよう。
荊棘の路を越えて飽くまで正しく生きよう
吾等は祖先よりも勇敢である、
そして吾等の子孫は吾等よりも更に勇敢であらう。

この地上を祝福せよ、

これまで此の地上は
あまりに苦いものとされて來た。
地上の薄暗に薔薇色の曙を來らせるために
その本質を生彩あらしむるために
丘の上の巨大なる鐘を撞き鳴らし
清朗な空氣に胸ふくらませて
共に曙の歌をうたはう。

春の耕地

旅にして
汽車の窓から見る廣々とした田圃の眺め
その間に點在する田舍家
それらはみなありふれた景色である。
だがその上に春の日がいつぱいに輝いてゐる
永い冬を過ぎた田は平らに柔かく溫かさうに擴がつて
厩から引き出した藁肥がところどころに置かれ
耕作の時期の來た喜びを語つてゐる。
茅ぶきの田舍家のほとりには櫻の花が咲いてゐる、
東北地方の習とて梨の花も同時に咲いて

房々と白く輝く花の簇が風に動いてゐる、
あまりに無雜作で豐かで勿體ないほどの美しさだ。
竹藪や杉の林も明るくそよいでゐる、
柳やポプラが若葉を輝かしてゐる、
厩では馬が青空を覗いてゐる、
田の畦にはさかんに若草が萠えてゐる。

ありふれた田園の何といふ晴々しい目覺めであらう、
何といふ新鮮な美を示してゐることだらう、
過ぎゆく汽車の窓で
私は蛙のこゑをきかない、
また雲雀のこゑをきかない、
また若草のなかに菫や蒲公英や土筆のまじつてゐることを細かくは見
得ない、

だが土地そのものがいま溢れるやうな音樂であり歌であることを
魂の奥ふかく感じながら通るのだ。

散文詩

農民の群に

心は年をとらない、心は境遇から自由にされてゐる。私はいつも眞の民主的な生活を求めてゐる。また、自分の戀の對象としての若い美しい女性を求めてゐる。ことに旅の寂しき日に於て、心は二十歳の若さに立ちかへる。おお、年齢のなかを惱ましい季節の情緒のなかを、私は限りなく慰めなく漂泊し續ける。充たされざる心の空虛がつねにある。だが、心の求める幸福はさう散らばつてゐない、微笑と落着きとの淡い幸福の一日を過ごすことが出來たら、それで最上だと滿足しろ！

今日もさういふ氣持で、この酷寒の一日、旅の途中、自分の生れた鄉土にちかい町の停車場で、集まり來る土着の人達の靜かな雜沓を微笑んで見るのである。私がこの中に居ることは、鮒が仲間と沼に泳い

でゐる安易さと親しみを感ずる。そして宿命的な悲哀を感ずる。

この邊の人々の防寒具を見ると、農村の人々の無頓着とそして一面に於てひどい窮乏を十分に語つてゐる。もとより流行といふものが全然ないにきまつてゐる。みな恐ろしく古風な物を着てゐる。それでも彼等には唯一の、たぶん親も妻も子も共用する毛布でありマントであるのだ。

ここに薄青地のインヴアネスを着た四十男がゐる。その背後には幅廣いバンドがあり、古いフロツクコートなどを聯想させるボタンが處處についてゐる、十年も經つと流行が一廻りするときいてゐたが、あまり古風なのも新流行のやうな面白味があるものだとつくづく感心して私は見た。都會でなら假裝行列ででもなければ着られぬ代物だが、この男はそれを着ていかにも愉快さうに傍の人と語つてゐる。草鞋ばきの一人の老婆は、茶色のぼろぼろの毛布を纏つて、よごれた大風呂敷を背負つてゐるが、その風呂敷の中ごろに、また小さい包をくくりつけてゐる、そしてこの老婆は汽車に乘るときに、客車の戸口にこの風呂敷包がつかへることによつて始めて惶てるのである。

酒に醉つて赤い顏した爺さんがやつて來る、古いマントを着てゐる、いくらかの米を賣つての歸りらしい。それが構内にはひるとあまり直接關係のない新しい掲示を見つける、何だらうと思つて懷からサツクを出し、眼鏡を出さうとしたはずみに、眼鏡をぱちんと地面に落してしまつた。すると同時に爺さんは

『アツ、三十錢損した』と聲をあげた。惜しさうにそれを拾ひ上げて見てゐたが、兩方とも毀れてゐるので、あきらめて其處へ捨てた。すると傍に洟たれ子供をおんぶしてる内儀さんが、その眼鏡の金色の緣を拾つて、負うた子供をふり向いて『ほら』と言つて渡した。全くいい玩具だ。そして子供を搖すぶりながら子守唄のやうに節つけて歌ふ。

眼鏡をかけらんせ
眼鏡を落した、

眼鏡をかけらんせ

眼鏡を落した。

と、何度も繰り返して歌ふのである。爺はまた思ひ出したやうに眼鏡の玉の破片の一番大きいのを拾つて、それを眼にあてて掲示を讀んでゐる、そして口の中で『安物は駄目だ』と言つた。よく見えなかつたのであらう。

それらの人達の中に、いかにも都會風な富を誇る人が異鄉人のやうにはひつてくるのは、(たとへば臘虎の襟の紳士とか黑い毛皮の襟卷のハイカラ女とか) 一種の新鮮さを感じさせると共に、それが或る種の人間の心内にほとんど共通にひそんでゐる贅澤心、優越慾の表はれである場合には私は堪らない反感を持つ。そしてこの貧しい自分でさへこの田舍では、さういふ慾望をともすると起し勝ちである事に、私自身に對して蟹が泡ふくやうに腹を立てる。『平等を思ふ思想と行爲とがばらばらに離れてゐては何にもなるまい。』と。

街道

溫泉への咽喉をなしてゐるここの二階からはいろいろのものが見える、深い溪谷をはさんで峙つ山岳の綠、その上に舞ふ鷲、雨あがりなどには山の間に描かれる虹、木の間にほのみえる瀧——直ぐ窓下の街道を人力車は絶え間なく通る、自動車は五分毎に往來する、徒步の人も可なり多い。夜が明けるから夕方までそれがつづく。

眞夏だといふのに白い手套をはめた洋服の紳士が氣取つた樣子で、人力車の幌をその手で抑へて通る、煙草をふかした藝者を中に挾んで二人の男が揚々と自動車で通る。この溫泉場でたくさんの男女の交はす談話動作は、三味線と太鼓の音、酒、抱擁、そして入浴、その場限りの愛憎、そして『さやうなら』に盡きてゐる。

この自然が一種の憑き物された狀態にある夏にも、この溪谷の奥に

ある村落の人々の生活は何の變化もない。相變らずの貧しい農民であり、炭燒きである。朝早くカランカランと鈴の音がたえ間なく街道にする、それは炭俵をつけた馬の群が山中の部落を下りこの溫泉場を通り、更に××市の方へ急ぐので、馬の頸にさげた眞鍮の大きい鈴の音だ。私はそれに眼をさますのである。馬は續く。出て見るとその馬を曳く人は誰でも大きい炭俵を背負つてゐる。馬にのみ重く荷をつけないでその勞力を馬と分擔してゐるのだ。その馬曳きは男ばかりでなく、女もある、ゴーガンを喜ばせるやうな娘もある。

今日十一時ごろ、荷車の上に四十位の男が繃帶した足を投げ出して腰かけ、その荷車をカラカラカラと女が曳いてゆくのを見た。着物が黑木綿で草鞋ばきなので、二階からは幾つ位の年齢かはつきりわからないが、三十位の細君らしく、まるであたりまへの事のやうに何の羞恥もなく××市の方に向つて曳いてゆく。その男は日がカンカンと照つてゐるのに帽子も被つてゐない、そしてカラカラと荷車が遲ざかつてゆく。足を怪我したので一里半ほどある市の醫師に療治に通ふのであらう。

夕方またにぎやかな街道の中をカラカラと音たてて、男を乘せた荷車を女が曳いて歸つてくる。其處に私は何の作爲の跡なき天衣無縫の眞面目な生活を見る。生れた農民の素朴、他人の享樂的な生活に對する沒交渉、一日一日の尊い勞働、さういふ心持にはおのづから人に頭を垂れさせるものがある。

眞の勞働の心は、この地上に於てかういふ人達にのみある。その他の理論的模倣者は何物でもない。

踊り子

『今夜も大した太鼓の音だね。』
『ええ、私、また行つて見たいわ。』
『まるで子供のやうだね、おまへは。』
『でも面白かつたんですもの、顔半分に白粉を塗つた男が腰を曲げて太鼓を叩いたりなんかして……あんなお祭はわたし始めてですよ。』
『ゆふべおまへ達はまるで足が地面につかないやうに浮々してた。』
『姉さんだつて面白がつてゐましたよ……それからあの暴れるやうな踊は何でせう。』
『八木節の踊だらう、ああなると踊ぢやないね、まるで勞働の興業だ、よくもあんなに根がつづくものと思ふよ。』
『私も何だか可哀想に思ひましたわ、なんか猿でも踊つたあとで物を

貰ふのを樂しみにして踊つてるやうな感じでしたわねえ。』
『うん、ほんとうに動物を連想させるね、まだ妙齡らしいが、ああやつてまるで草履でも板に無理に叩きつけられるやうに、擦り切らされて了んだね。』
『踊つたあとで幕のそとに出てきた顔を見てもみんな悄氣た顔をしてゐましたよ。』
『さうだつたかなあ、なんにも面白いわけはないからね、あれが田舍の夏にみんなで樂しんで踊ることの出來る盆踊だと思ふと不思議な位だね。』
『盆踊なんですか。』
『さうさ、あれは上州の方かの盆踊だよ、踊も見世物となると苦痛だといふいいお手本だ、自分の心から湧いた感興でやるのでなくて興業だからね、これはウイリヤム・モリスなどが勞働もいい制度の世界では踊りのやうに愉快だといふ論理の反對の說明になる。』

『あの踊り子の中には、いつか白山のお祭で見たのが交つてゐるやうでした、あれかも知れない。』

『ああいふ虐げられた妙齢の女といふやうなのは、みんな似たやうな表情をしてゐるよ、その女かも知れないし、また、さうでないかも知れない。』

朝と夜

1

小さい停車場の朝、そこには近在の百姓達や女や少年やが三十人ちかくも、もう來る頃の列車を待つてゐた。北の方の崖のかげから煙が見え列車が見え、轟きが近づいてくる、次第に近づいてくる。皆は列車に駈け寄り、『××や』『〇〇や』と叫びながら探し廻る。

列車には日露戰爭にゆく兵士達が、長い旅の疲勞と出征の不安とに蒼ざめてゐた。

『××が居たぞや』と、ある窓口で老爺が叫ぶ、若い兵士が顏を出す、駈け寄つたは百姓婆さんと若い二十歲位の女、女は二つ位の男の子を抱いてゐる。

百姓婆さんはいきなり若い女から子供を取りあげて、兵士の前にさ

しあげる。

『ほうれ、こんなに大きくなつたぞや、よつく、見てゆけ。』

皆は涙ぐむ、兵士は同車の仲間の手前、羞かしがる。

『ようがす、ようがす、よく見ました』と瞬きながら言ふ。

おお久しく遇はなかつた妻は何にも言はない、父と母との顏が眼前に曇る。

久しぶりの小さい停車場、若い兵士を生んだ土地の、なだらかな山は春の淺綠、田には蛙がコロコロ、遠い沼の微かな綠玉（エメラルド）それらも一瞬の瞥見。

停車時間五分、汽車は動き出す。

『××や。』『〇〇や。』人々は一しきりまた狂はしく叫ぶ。

『さやうなら、父母よ、妻よ子よ、故鄕よ。』

2

『わたしはあの頃は十ぐらゐだつたでせうか、近所なので弟とよく萬歲をとなへに出かけました、お轉婆むすめのわたくしは夜なかでもなんでもかまはずに出かけました、幾度も萬歲をとなへたので、しまひには聲が出なくなつたほどですわ。親達に叱られるのもかまはずに行きました、ある夜も一時頃でしたが、出征の兵士が通るといふので、弟と二人で出かけました、その時あの停車場での見送り人は弟と二人きりでした、列車から顏を出した一人の將校らしい方が言ひました。

『ここは二人だけか、よし、よし、感心だね。』さう言つて林檎を私達に一つ宛（づつ）くれました、青森の方から來る兵士達でしたから香のいいい赤い林檎を……そして汽車は出て行きました、幼な心にも何となく寂しうございましたわ。』

富者

友の若い奥さんが死んだ、室いつぱいの生花や造花が不幸を際立たせるやうに不吉な色彩を競つてゐたが、柩につづく會葬の群が一月末の薄さむい途上に出ると、それらの花もいかにも貧しげに散らばつてあまり眼立たなくなつた。生花や造花の一つ一つがいかにもたよりなささうに人足の一人一人に運ばれるのである。人々の悲哀も室の中にゐるやうな息詰つた感じがなくなつた。

會葬の列は靜かにしめやかに祈るやうな心でお寺まで歩みを運ぶべきであらうが、この場末の平凡な電車通りは徒らに埃つぽく騷々しく稍々もすれば會葬者を退屈な散歩のやうな心持に導くのである。私はその途中で偶然にも實にみすぼらしい一つの葬式に遇つた。それは何の飾りもない露き出しの棺を荒縄でからげて無雜作に擔ひ、ただ二三

人の會葬者のついてゆくこつそりとした葬式である。むろん花などは一つもないのである。氣をつけないと見落して了ふほど色彩といふものがないのである。けれどもこちらの葬式の人足どもはそれをいち早く見つけたのである。

『どうでい、こつちを見ろ、あれでも葬式かい。』

と柩を擔ぐもの、生花造花を持つもの、が揃つて威張るのである。ところがどうした廻り合はせかその氣焔のまだ收まらぬうちに、向うから街の人に目を瞠らせないでは措かないといふ風な盛大な葬列が來たのである。美々しい放鳥の籠四個、無數の生花と造花。靜々と長くつづいた人力車の群。それを見るとこちらの人足どもはさつきの鼻息はどこへやら、恥かしさうに押し默りながら、いかにも肩身が狹さうに急ぐのである。偶然ではあるがこの路上で僅か數分をへだてて、まるでこの世の極貧と中流と富者との葬式の三つの雛型を見たわけである。世間の人の死はこのうちのどれかの形式で葬られるのであらう。どの

雛型も結構である。ことに美々しい葬式を見ると、富の所有の快感はかういふところにこそ力瘤を入れて示されてゐる。現にこの人足どもはこの華かな富の誇耀にすつかり魂を打たれて了つたのである。そしてこの賑やかな美々しさは生々しい人間の悲哀をまぎらすには全くい い方便である。生きてるものは出來るだけ死者の悲哀を美しく賑やかに遊戯化して迅速に忘れに了ふに限る。ただ貧しい者はさういふ手段をとる暇も金もないので、悲哀そのものを二重の重さでとぼとぼと徐ろに擔つてゆくのである。

頽齢

八十二になる老婆が、お城山の麓の青草のなかを杖をついてさまよつてゐた。傍の小徑はあまり人通りのないところだが、通りかかつた人は不思議さうにそれを眺めて、それが町でも名の知られた××家の老婆だとわかると、何しにこんな處に來てるのだらうと再び驚きながら、恭しくお辭儀をして、

『おばんさん、何してござるのだね。』

ときくのであつたが、老婆は

『ええ、なあに……』

とばかり言葉を濁らしてゐた。老婆は頽齢に霞んだ眼で青草のなかを熱心に探すのである、そして虎の尾と、いたどりの葉を見つけると、ほくほく喜んで、風呂敷包につつんだ小さい笊の中に入れるのであつ

た。その時ばかりは古い能の面のやうに硬く黄ばんだ顔も少しばかり柔かく輝くやうに思へるのである。

町はお城山の傍を流れる大きい河のほとりにあつて、河向うにある老婆の家から此處までは長い橋をわたつて十町近くもあるのである。河をへだてた南方は遠くひらけて廣々とした田野のなかに幾十となき部落が點在してゐるのが、この小徑をお城山の方に少し登れば一望できるのである。言ふまでもなくこの老婆にも若い娘盛りはあつた、このお城山に天主閣が聳えてゐる頃は、やはり祿高の多い武士の妻としての樂しい時代があつた。お城の凡てが取り去られる頃に長女が生れた。その娘は可愛らしく小柄で、色白の端正な美しい顔の、町でも評判の娘であつたが、十七の時に、この町から六里をへだたつた町に嫁づいたのである。そして娘さへ今は六十五の老齢になつて見れば、過ぎし日のことはみな夢のやうに遠い。娘は數年來、リウマチスを病んでもう足腰も立たなくなつてゐる。娘の居る町もこのお城山にのぼれば幽かに見えるのであらうが、八十二の老婆の眼には傍ちかい河を泳いでゐる鷺鳥さへ見えないのである。

二人は近年ことにも逢ひたく思ふのであるが、お互の思ふにまかせぬ身體の不自由と遠距離とに、この親子はこの數年間は一度も逢ふことが出來なかつた。戀しい思ひのみ激しく燃えるのである。

虎の尾といたどりの葉とは娘のリウマチスの藥であつた。老婆はそれを取つて杖をついて家に歸つてくると、誰の手も借らずに馬の飼葉切りで、ザツクン、ザツクンと細かく刻むのである。危いから誰か若い者にさせようとして止めても、返事もしないで(耳も遠いが)いつも獨りで刻んで、それを日向に乾して、娘あてに小包をつくり、それを風呂に入れてはひると病氣がよくなると敎へて送るのである。娘がリウマチスになつたときいてから毎年さうして送つてゐるのである。娘

は敎へられた通りにしてゐるが、老齡に蝕ばまれた身體のよくなりやうもない。そして用のある時は相變らず半ば這ふやうにして座敷を腰で磨つて歩くのである。

娘は故鄕の草の葉を入れたこの湯に溫まりながら八十二の親を思ふのである。老婆は、虎の尾やいたどりを摘みながら、またその葉を刻んだり乾したりしながら六十五の娘を思ふのである。そこに年齡が忘れられてるやうである、否、いかに老齡であらうともそれは毫も不自然ではない。母はいつまでも母であり娘はいつまでも娘である。

小春日和

十坪に足らぬ廢園のやうな庭には、二三本の小松、そして點々として咲くコスモス、鷄頭、ゼラニウム、孔雀草など、いろいろの期節のものが、今を盛りと彩つて居る。溫かい夢心地の小春日和！　空の青さ！

その花のあたりを時々、白つぽい小猫が通る、よく見ると三毛である、灰色に極めて汚れた亂れ毛をしてゐるのと、せかせかと急いでときどき通るので私の心を惹いた、私は昨日からこの友人夫婦の新居に客となつて來てゐるのである。緣先に蹲んだ私は、『チョッ、チョッ』と舌を鳴らして、通りかかつた小猫を呼んで見た、小猫は聲をきくと、振り向きもせずに急いで遁げて行つた、そして隣り境の塀の下の小さい穴を潛つて行つた。

『お隣の猫ですか』と私はきいた。
『野良猫ですよ、お隣の物置に居るんですけれど……』と友は答へた。
『それであんなに痩せてるんですね、營養不良なんですね。』
『そればかりでなく、病氣なんでせう、あの猫は』と友は答へた。
『さうでせうか。』私は腑に落ちないやうに言つた。
『でも、もう一匹の方は毛並も艶々して、身體が大きいんですから』
と友は說明した。
『ほう、もう一匹居るんですか』と私は驚いた。
『え、同じに生れたのが居るんです。二匹で時々あるいてゐますよ。』
『では、同胞の野良猫といふわけですね、それは、どうも……』
『一匹の方もやはり三毛で、綺麗に丸々してゐますよ。』
『お隣の奥さんも呑氣ですわね、あゝやつて物置に住まして置いて』と
友の細君は言つた。
『でも仕様がないだらう、猫どもが外に行く處がなければ可哀想にも

なるしね、それより自家の物置に引越しされないように要心しないと
いけないよ』と友は半ば戯談ながら警戒した。
『は、は、は。』
『ほんとうですわね。』
『あんまり育たないうちに棄てなければ、今となつては仕方がないで
せうね』と私は言つた。
『親もやつぱり野猫だつたさうですよ、それが生んでいい加減、乳ば
なれするやうになつた頃、棄ててどこかへ行つて了つたんですつて…
…』と細君は言つた。
『ほう、なかなか利口なもんですね、自分もさうやつて育つて來たか
ら、子供も大丈夫育つと思つたのでせう。』
『それに妙なもので、雀なんか庭に遊んでゐると非常に敏捷に飛びか
かつて摑まへるんですよ』と友は言つた。
毛並のいい方の奴はついぞ姿を見せなかつたが、よごれた方の小猫

は相變らずせかせかと歩いてゐた、こんなに小さな生物も境遇は全く因襲を破壞して、いかにも人間と對等に自活の歩みを續けてゐる、人間に媚びる血の代りに鋭い寂しい野性が彼等に流れてゐる。

村の哀愁

溫泉宿の暮春の午後。

二階の緣のソファに倚つて竹藪にあたる明るい日光をながめ、寂しい川瀨の音をききながら、微かな湯疲れの退屈さを感ずる私は、附近の漫歩を思ひ立つた。街道をさしはさむ寂しい部落、それはただ一軒のこの大きい溫泉宿の華やかな空氣、整然たる設備とは正反對の衰頽したものであつた。私がこの街道の土を踏むことは十餘年ぶりであるが、いかにも凡てが昔のままである。歩みゆくに部落の家並はやがて疎らになり、田や畑が兩側に見え二三丁へだてた右手を川が荒い瀨の音をさせて流れてゐる。路傍の古い柳の枝がいつせいに青い芽を吹いてゐる。左手の田圃には數人の農夫が田の土を唐鍬で起こしてゐて、その向うの桑畑らしい中に殘んの雪かと疑はれるやうに點在してゐる

のは牛の群であるらしい。

あんなにいい天氣だつたのに空は俄かに曇り出した。眉に逼る黄褐色の粗い羅紗のやうな山々の肌、その間の奥の方の一つだけが斑らに雪を載いてゐる。空が曇つてるためが眺望が馬鹿に狭く陰氣に思はれる。この街道を次第に溯つて奥の方の次の温泉まで行つて見たいといふ輕い氣持さへ持つてゐた私の漫歩は、思ひもかけぬ寂しい重い氣分に代へられて來た。私が少年時代に映つたこの邊の風景はもつと廣々とした輝かしいものであつたのに、これでは便りない寂しさを感じさせるだけだ。

空はだんだん暗くなつて、思ひがけなくも大粒の雨を落して來た。急いで近くの農家の軒下に駈け込んだが、庇が狭いのでやや横降りの急雨は、私の足の方を遠慮なく濡らすのである。その縁に身装も髪も穢い姉らしいのと遊んでゐた女の子は、見馴れぬ私の姿を見ておびえ泣きながら、姉の背におんぶしようとするのであるが、その垢まみれ

の着物や豚の尻尾のやうな髪も佗びしい。暫くすると雨は小降りになつたので、そのひまにと宿の方に急いで歩き出したが、またさつきよりも大粒の急雨が沛然としてやつてきた。あやにく路の兩側に何の物蔭もないので濡れながら駈けると、左側に路を少しへだてて小さい家があるのでそこへ雨を避けようと逃げ込む。さて、その家は庇といふものは殆んどないので雨の避けようもなく困つてしまつたが、見ると同じ屋根の下に一坪足らずの物置らしい空地がある。薪を置くところらしく、枯れた杉葉が少し積まれてあるだけである。私はその土間に身を入れたが、雨は疎らに屋根を漏れて顔をなま温く打つので、破れた屋根を仰ぎ且つ周圍を見廻しながら益々身を小さく犬のやうに蹲まつた。ひどいあばら家で壁は中から塗つただけの片側壁で、その骨に用ゐた煤けた竹が外部に露き出しになつてゐる。家の内は六畳一間位の大きさらしく、ひつそりして何の物音もしない。いつたい此家に人が住んでゐるのかしら。それとも家族が田畑に働きに出てゐるのか。

まどうやら老人でも留守に殘つてゐて、もぞくさと身じろきしてゐるやうなけはひも感ぜられる。しかしそれは屋根や土に降る雨の音であるかもしれない。

そこへ水汲むための手桶をかついだ少年が雨に驚いて笑ひながら飛び込んで來る。その手桶は古いのに新しい板をモザイクのやうに當てて修繕したもので、新舊あざやかに見える。

雨は止みさうもない、何といふ氣まぐれの雨だらう、山根であるこの邊の天候は實に見當がつかない。メーメーと牛の啼くこゑが遠くでする。さつき白く斑らに見えた牛の群も濡れてゐるのだ、私の心に滿ちてくる極まりなき哀愁は、いまこの薄暗いあばら家に蹲まることのいかにもふさはしく感ぜられた。

——終——

大正十一年六月三日印刷
大正十一年六月十日發行

（定價壹圓參拾錢）

著作者　白鳥省吾

發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話番町（局）八〇八九番　七〇八番

振替（東京）一七四二番

◀共生の旗▶

印刷所　東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社
電話小石川五九二番

印刷者　佐々木俊一

詩壇に新時機を劃すべき新叢書也

◆◆◆◆◆

現代詩人叢書

▽恩地孝四郎氏裝
▽紙數百六十頁宛
▽一冊定價六拾錢
▽送料一冊六錢宛

新しい詩の時が來た。新しい詩の精神は蘇つた。今や詩は其の本來の意義と勢力とを時代と民衆との上にもつに至つた。詩人は象牙の塔を降つて巷に出で、詩人の聲は端的に現代生活の脈搏を傳へる。此時に當つて、小社は『現代詩人叢書』を出版し、一人一集、現代詩壇の精華を集めて、購讀携帶兩つながら便なる小册子を提供する事とした。大方の歡迎は期して待つ所である。

第一編□沈默の血汐（既刊）野口米次郎氏著
第二編□蠟人形（既刊）西條八十氏著
第三編□預言（新刊）川路柳虹氏著
第四編□青き樹かげ（新刊）三木露風氏著
第五編□季節の馬車（近刊）佐藤惣之助氏著
第六編□炎天（近刊）千家元麿氏著